

第 19 回(2013.12.12 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

長篠の戦いと長久手の戦い

どちらも有名な戦いですが、名前が似ているので、どこで誰と誰が戦ったか、その歴史的な意義など混乱している人も少なくないようです。もう一度、脳細胞を整理してみましょう。

「長篠の戦い」とは、織田信長と徳川家康の連合軍が武田勝頼(武田信玄の嫡男)の軍を破った合戦で、武田軍団の精鋭が全滅し、織田信長にとっては天下統一のための最大の障害がなくなった戦いです。

「長久手の戦い」とは、豊臣秀吉と、織田信長の次男信雄と徳川家康の連合軍との合戦で、秀吉と家康の直接対決はこの一戦だけでしたが、決定的な勝敗はつきませんでした。

天正3年(1575)5月、武田勝頼の軍1万数千人が徳川家康に属する長篠城を包囲しました。武田家の武将奥平信昌が武田信玄が亡くなると徳川方に寝返ったため、信玄の後を継いだ勝頼は信昌の居城である長篠城を攻撃しました。これが長篠の戦です。この報に接した徳川家康は織田信長に援軍を求め、家康の5千人と信長の3万人の軍勢で長篠城に近い設楽原で激突しました。この合戦で武田信玄以来の精鋭部隊である騎馬軍団は、織田信長の鉄砲隊によって壊滅しました。これによって鉄砲の威力が証明され、騎馬軍団から鉄砲を主力とした戦法に転換されるようになり、戦法の革命ともいべき戦いだったといわれていますが、最近の学説では疑問がもたれています。

長篠城が包囲されたとき、奥平信昌の家臣鳥居強右衛門(とりいすねえもん)が城から脱出して家康に知らせ、援軍到着を一足先に知らせるべく城に帰る途中武田軍に捕まりました。城内の兵に「援軍は来ない」と嘘をいえば命を助けてやるといわれて高い櫓に上りましたが、強右衛門は「援軍が来るから頑張れ」と叫んだため、その場で殺されたという逸話があります。

天正12年(1584)3月、織田信雄は、秀吉と共に弟の信孝を信長の後継者として擁立した柴田勝家を討ちましたが、その後秀吉が信雄に臣下の礼をとるよう命じたため、徳川家康に援軍を求め豊臣秀吉と戦うことになりました。これが長久手の戦いです。

家康は秀吉側の森長可(本能寺の変で織田信長と共に死んだ森蘭丸の兄)の軍を破り、小牧山城を占拠しました。その後、戦場は長久手において両軍が激突し、この戦いは家康軍が優勢でしたが、織田信雄が秀吉と単独で和睦したため、家康も戦う名目がなくなり、戦は終わりました。この戦いは小部隊による局地戦でした。戦いそのものは家康が優勢だったとはいえ、戦略的には秀吉の勝利だったという見方があります。こうして、天下の趨勢は秀吉のものとなっていった歴史上重要な意味をもつ戦いでした。

この小牧・長久手の戦で、秀吉軍の池田勝入斎恒興を討ち取った永井直勝は、刀・脇差・槍と共に黒糸威の甲冑も分捕りました。これが永井家の家宝となりましたが、天下が徳川のものになったある日、池田輝政(恒興の子)は当時5000石だった永井家を訪れて、父恒興の甲冑を見て「父ほどの者を討ち取った5000石とは」といって涙を流した。これを伝え聞いた家康は、永井直勝に5000石を加増して1万石の大名にしたという逸話があります。戦国の世が治まった直後の話だから、いかにもありそうな話ですが、後世、家康を称えようとして、権力者に媚びる者が作った話かもしれませんね。

三方ヶ原の戦いと関ヶ原の戦い

「関ヶ原の戦い」は、徳川幕府の創設にかかわる大切な役割を果たした戦いで、歴史教科書にも登場しますから、覚えている人も多いのですが、それ以前に「三方ヶ原の戦い」と呼ばれる戦がありました。この戦いも学習したはずですが、覚えている人は少ないようです。じつは、ここで奇跡が起きなければ天下の形勢が全く分からなくなり、織田信長も天下を取れず、また徳川家康などは歴史教科書にも登場しなかったかもしれません。それほど重要な戦いでした。

「三方ヶ原」とは、元亀3年(1572)12月22日、徳川家康が織田信長の援軍と浜松において武田信玄と戦って敗北した場所です。もう少しで家康の居城である浜松城などは、まさに風前のともしびの状況でしたが、信玄が発病したため九死に一生を得たのです。家康が陣中で死を覚悟したのは、この戦いと「大阪夏の陣」で真田幸村に攻められた戦いであるといわれています。

また、「関ヶ原」とは、慶長5年(1600)9月15日、全国のほとんどの大名が豊臣方(西軍)と徳川方(東軍)に別れて、美濃国(岐阜県)において激突した場所です。この戦いで東軍が勝利して、徳川家康による天下統一が実現したので、「天下分け目の合戦」とも呼ばれています。

甲斐国古府中(甲府市)を出発した武田信玄は、2万8千の兵力で天竜川沿いに遠江国(静岡県)に入りました。これに対して徳川家康は、浜松城に立てこもって籠城作戦に出ました。籠城は味方の援軍が背後から攻撃してくるのを待つか、相手が兵糧不足や兵の疲弊による戦力低下を待つかですが、この時の家康は武田軍に対して打つ手がなかったというのが実情でした。ところが、武田軍が裸同然の浜松城を横目で見ながら通り過ぎようとしたため、好機と見た家康は城を出て背後から襲撃しましたが、三方ヶ原において完膚無きまでに叩かれて、這々の体で浜松城に逃げ帰りました。家康は逃げる途中馬上で怖さから脱糞したとさえいわれています。浜松城に帰った家康は、城門を開いて武田軍を待ち構えるという捨て身の作戦に出たのですが、ここで奇跡が起きました。武田軍が突然引きあげていったのです。じつは武田信玄が急病を発したためだといわれていますが、徳川方の鉄砲による狙撃で死んだという噂もあって真偽のほどはわかりません。

武田信玄は元亀4年(1573)4月12日死亡したといわれています。武田信玄の跡を継いだ勝頼率いる武田軍団は、その後「長篠の戦い」で織田信長の鉄砲隊により壊滅しました。これによって徳川家康は武田の本拠地である甲斐の国(山梨県)に攻め込んで武田家を滅亡させました。武田武士の生き残った将兵の多くは、家康の命令で徳川四天王の一人である井伊直政に預けられましたが、これは武田軍の軍法などを吸収するためであるといわれています。井伊直政は武田軍のまねをして甲冑や装備品を赤い漆で塗り、全軍を真っ赤に統一しました。これを「赤備え」といいますが、目立つので的に狙われやすいため、決死の覚悟がいる戦法で、これも武田軍の軍法から取り入れたものです。その後の数々の戦いで「井伊の赤備え」といわれて恐れられました。しかし、井伊の赤備えに勝る勇猛果敢な「赤備え」部隊は、大坂の陣で有名な真田幸村の軍であるといわれています。ちなみに真田家は武田信玄の武田二十四将の一人でもあり、「赤備え」部隊の本家です。幸村はいわば武田軍最後の武将だったといえます。

関ヶ原の戦いは、西軍の大將は毛利輝元で8万、東軍は家康が大將で10万の兵力で激突しました。関ヶ原における西軍の布陣は、笹尾山に石田三成の軍、天満山に宇喜多秀家の軍、南宮山に毛利秀元の軍、松尾山に小早川秀秋の軍などで、完璧な布陣をして東軍を囲んだのでした。ところが、小早川秀秋の裏切りで西軍が敗北しました。小早川秀秋は裏切りの功で岡山55万石の大名になったのですが、その後異常な行動をするようになり、関ヶ原の合戦の2年後に21歳で亡くなりました。小早川秀秋に直接背後から攻められた大谷吉継の祟りだと噂されました。

また、徳川家康の三男徳川秀忠(第2代将軍)は、徳川本隊3万8千の兵を率いて中山道経由で関ヶ原に向かいましたが、信州上田城の真田昌幸・幸村父子を攻め、逆に多くの兵を失い

城も攻略できず、結果的に足止めをくって天下分け目の戦いに間に合いませんでした。そのため、関が原では豊臣家恩顧の大名が東軍の主力になって戦ったため、勝ったといっても、西軍から没収した630万石の所領の8割は、福島正則などの豊臣家恩顧の大名に論功行賞として与えざるを得なくなり、戦後の経営が困難になったのです。

一説には、豊臣家恩顧の大名軍に先陣をまかせ、彼らが敗退したら秀忠の徳川本隊を投入しようと考え、わざと到着を遅らせて兵力を温存していましたが、あまりにも早く決着がついて本隊を投入できなかったのだという説もあります。しかし、もし先陣の大名軍が負けたら、勝ちに乗じて意気軒昂な西軍8万に加えて豊臣恩顧の武将が寝返えって加わることは明白であり、それに対して徳川本隊3万8千の兵だけでは勝てるわけがありません。これは家康を贖する者による作り話でしょう。

(篠井純四郎)